興福寺境内の調査

―第540次・第541次・第2013-32次

1　はじめに

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」（1998年）に基づき、寺観の復元・整備が進められている。この整備事業にともない、奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院、南大門、北円堂院などの発掘調査を継続しておこなっている。今回もその一環として、西室（西僧房）および北円堂院を対象として調査をおこなった（第540次）。また防災設備工事のため、興福寺境内各所で、発掘調査を実施した（第541次）。

第540次調査は、３つの調査区に分けておこなった（図298）。これをＡ、Ｂ、Ｃ区と呼称する。Ａ区は西室北縁部269㎡、Ｂ区は北円堂院北面回廊の一部138㎡、そしてＣ区は北円堂院南面内庭部44㎡である。西室南半は2013年（第516次）に、北円堂の回廊部分は、南面・東面と北面の一部を2011年（第483次）に調査している。Ａ区は西室の規模の確定と小子房の様相把握、Ｂ区は北面回廊未調査部分の様相把握、Ｃ区は灯篭や参道の痕跡の有無の確認を調査目的とした。調査は2014年９月29日に着手し、2015年１月16日に終了した。

2　西室北縁部の調査

西室の概要と既往の調査

西室の概要　興福寺は、中金堂と講堂の西・北・東をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、西僧房は「西室」、北僧房は「北室」、東僧房は「中室」と呼ばれている。西室は大房と小子房からなる。西室の建立年代は、『興福寺流記』等の史料から720年代と考えられる。建立以後８度罹災したとみられ、最後の焼失は享保２年（1717）で、以後再建されることはなかった。また、江戸時代中頃の絵画資料には、西室大房は描かれるものの小子房は描かれていないものがあり、小子房は大房より早く廃絶したと考えられる。

既往の調査と復元　西室の建物規模については『興福寺流記』など複数の史料に記述がみられるが、史料により異なる点も多い。西室大房の従来の復元は『興福寺流記』と地表に露出している礎石の実測をもとにしたもので、大岡實による案[1]と鈴木嘉吉による案[2]がある。大房について、両案とも梁行方向は４間、総長45尺とするが、大岡案は桁行９間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺等間とし、北室との規則性を重視する。鈴木案は、桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北６間は22.5尺、南５間は15尺とする。鈴木案は1955年にガス管埋設工事で確認された西室大房の東・南・北面の基壇外装を基にしていた。2013年度調査（第516次）では、大房SB10450の建物規模は、桁行10間、梁行４間で、南北62.54m（212尺）、東西11.80m（40尺）、柱間寸法は桁行の南端２間が各4.72m（16尺）、以北が6.64m（22.5尺）等間、梁行は2.95m（10尺）等間に復元されている。また、側柱心から地覆石外縁までの距離は、南面で2.10m、東面で2.70mとする（『紀要 2014』）。

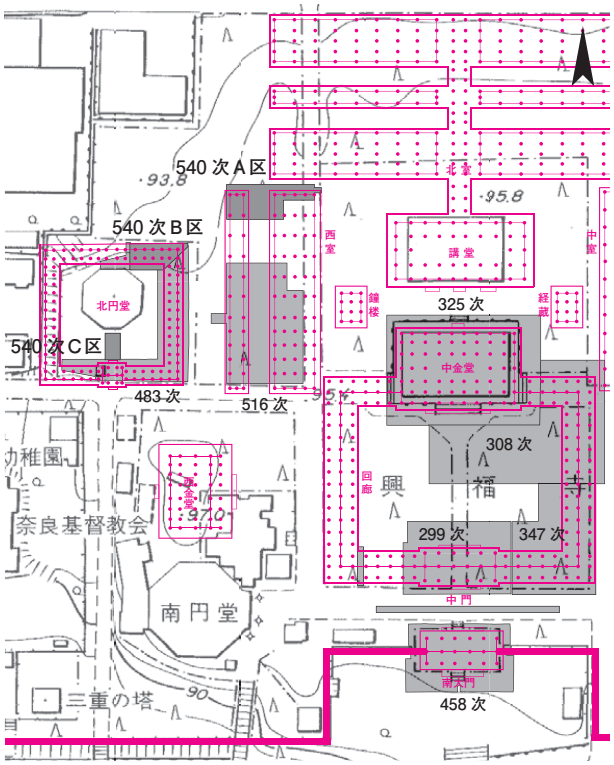


図298　第540次調査区位置図　1：2500

地形と基本層序

調査前の地形は、礎石が露出している調査区東半部分では概ね平坦で、調査区の西部では西に向かって標高を下げる。調査区東面は興福寺現境内の南北参道の位置にあたり、西室大房SB10450の東側柱筋想定位置は参道の路面下にある。

基本層序は、上から表土、褐色砂質土（土師器片を多く含む）、明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土の地山である。調査区中央付近にある南北溝群SD10601～10604より東方、西室大房の基壇の範囲では、基本的には地山上

面で遺構を検出した。同溝群より西方では、大部分で中世以降の整地土ないし土坑が認められ、その上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は、調査区東端で約95.2m、西端で約94.7mである。

検出遺構

検出遺構は、礎石建物１棟、掘立柱建物１棟、南北溝４条、円形土坑１基、方形土坑４基、土師器土坑１基、埋甕土坑11基、その他の土坑20基以上、カマド６基、近世道路１条である（図299）。これらは、①西室創建期から掘立柱建物廃絶までの１期、②掘立柱建物廃絶後から西室大房廃絶までの２期、③西室廃絶前後以降の３期の、３つの時期の遺構群に大きく区分できる。以下、それぞれの時期ごとに概要を述べる。

①１期

礎石建物（西室大房）１棟、掘立柱建物（小子房か）１棟で構成される。

礎石建物SB10450（西室大房）　桁行10間、梁行４間の南北棟礎石建物で、その北端の、桁行１間半分を検出した。柱間寸法は、桁行約6.6m（22.5尺）、梁行は中央２間が約3.2m（11尺）、その他は約3.0m（10尺）である（基準尺は１尺=0.295mとする）。桁行方向の親柱礎石間には間柱の礎石を２基ずつ配し、それぞれの柱間は約2.2m（7.5尺）である。親柱礎石位置では据付穴、抜取穴を検出した。礎石は安山岩や花崗岩の自然石による。安山岩の礎石は、長軸0.9～1.1m、短軸0.7～0.85m、成0.6～0.7mである。据付穴は径1.3～1.5mの隅丸方形ないし楕円形で、深さは検出面から30cm程度である。安山岩の礎石はいずれも据え替えの痕跡はなく、遺物も出土しない（図300）。ただし、花崗岩の１石（ハ・十一）は、長軸0.8m、短軸0.65m、成20cmで安山岩の礎石よりも薄く、やや小さい。礎石の下方に古い礎石の抜取穴と据付穴を確認した（図302）。後世に据え替えられたと考えられるが、抜取穴からの遺物は出土せず、その時期は不明である。またロ列の礎石は、当所位置より若干西方（現参道の西縁）へ動かされている。この所見は第516次の調査成果と一致する。また、イ・十一の礎石のみ抜き取られており、抜取穴（径0.7m前後）には凝灰岩の切石が捨て込まれていた。間柱の礎石は、残存しているものは８基中２基のみで、大きさは径0.5～0.6m、高さ25cmである。そのほかの礎石想定位置では、調査区際や土層畔の断面で礎石の据付痕跡を検出した。据付穴は径0.7m、深さは検出面から10cm程度。間柱の据付穴からも、遺物は出土していない。

基　壇　礎石建物SB10450の基壇は、地山削り出しで造られている。第516次調査では、基壇南縁で上面にわずかな積み土を認めているが、今回の調査では確認できなかった。基壇北面では、基壇外装の地覆石と羽目石を検出した。大房北妻の礎石心から地覆石外面までの距離は約1.9m（6.5尺）である。これと、第516次調査で検出した基壇南面の地覆石との外面間距離は約66.5m（225尺）で、南北の基壇規模が確定した。一方、基壇の東面と西面では、後世の遺構や攪乱によって削平を受け、基壇外装は確認できなかった。

基壇の東面は後世の参道造成で削平されており、西面は存在しないか、後述の南北溝郡により削平を受けているため、その痕跡すら確認できなかった。北面では地覆石と羽目石のみを確認し、犬走りや雨落溝などは認められなかった。基壇外装の石材は、すべて二上山産凝灰岩の切石である。大房礎石ハ列より東方では、凝灰岩２石が上下に重なり、地覆石と羽目石と考えられるが、上方にのる凝灰岩が下方の凝灰岩よりも基壇の外に傾く（図304・305）。一方、ハ列より西方では、地覆石のみが残存し、地覆石上面には羽目石をのせる仕口を残す。地覆石の底面には瓦片が混じる整地土が敷き込まれており、後世に据え替えた可能性が高い。

掘立柱建物SB10440　大房西側柱の約２m西方には数条の南北溝群があり、この溝埋土を除去して南北棟掘立柱建物の柱穴を検出した。柱位置や柱間寸法から、第516次調査で検出した掘立柱建物と一連の建物と考えられる。建物全体規模は桁行10間、梁行２間で、今回の調査では、その北端にあたる。礎石建物SB10450と梁行方向の柱筋を揃え、またSB10450と同様、親柱と間柱がある。検出したのは、東側柱の柱穴５基と、棟通りの位置にあたる柱穴の２基（底面のみ）である（図301）。そのほかの柱穴は、後世の土坑群により削平されている。親柱の桁行の柱間寸法は、約6.6mである。梁行の柱間寸法は、この調査区では確定できないが、底面付近を検出した棟通りの柱穴や第516次の調査成果に基づくと、約2.6mと考えられる。建物規模は、桁行はSB10450と同じ約62.5m（212尺）、梁行は約5.2m（8.5尺）に復元できる。親柱の柱穴掘方は一辺約0.8mで、深さは検出面から約0.8m、

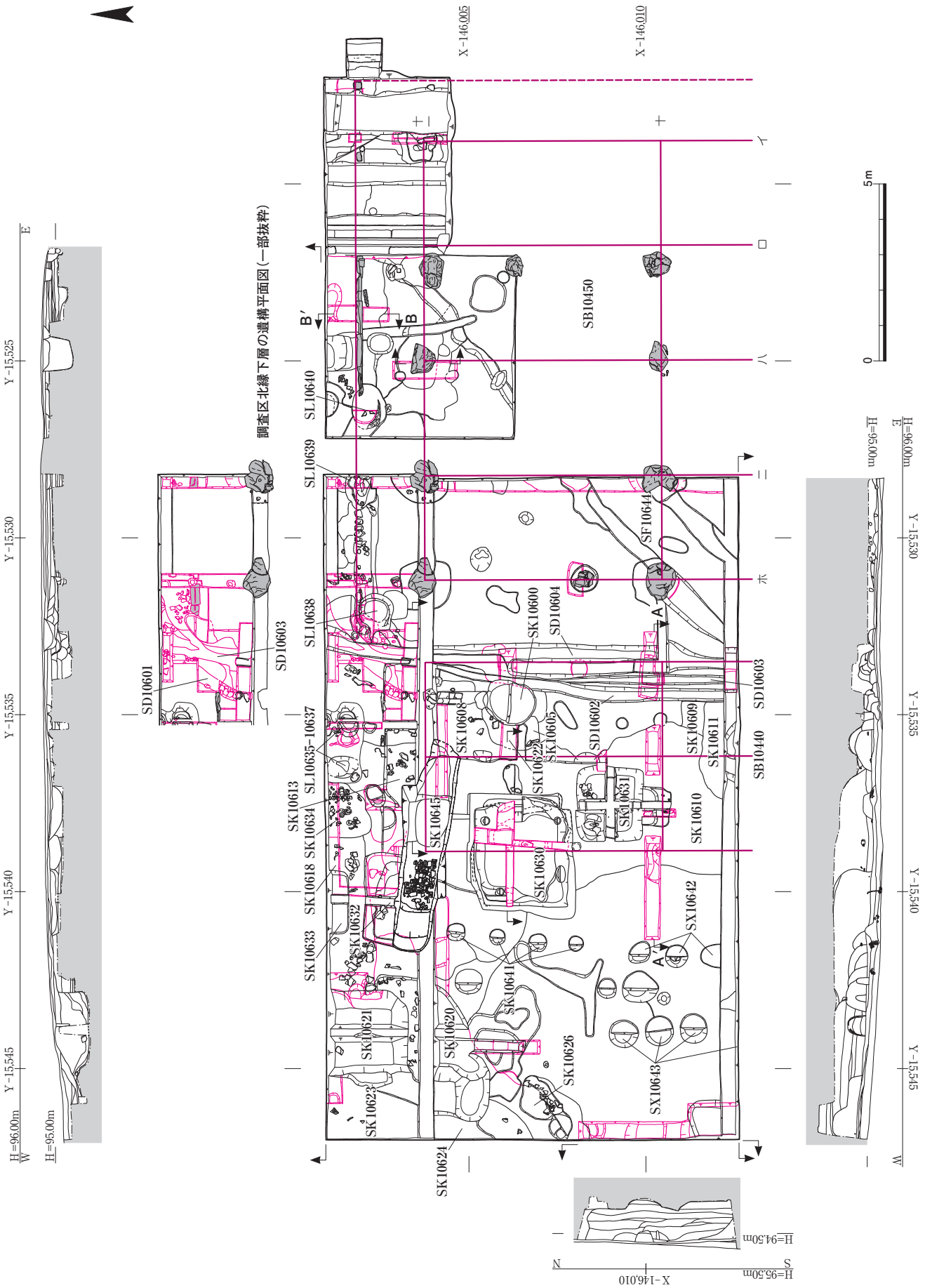


図299　第540次調査A区（西室北縁部）遺構図・土層図　1：150

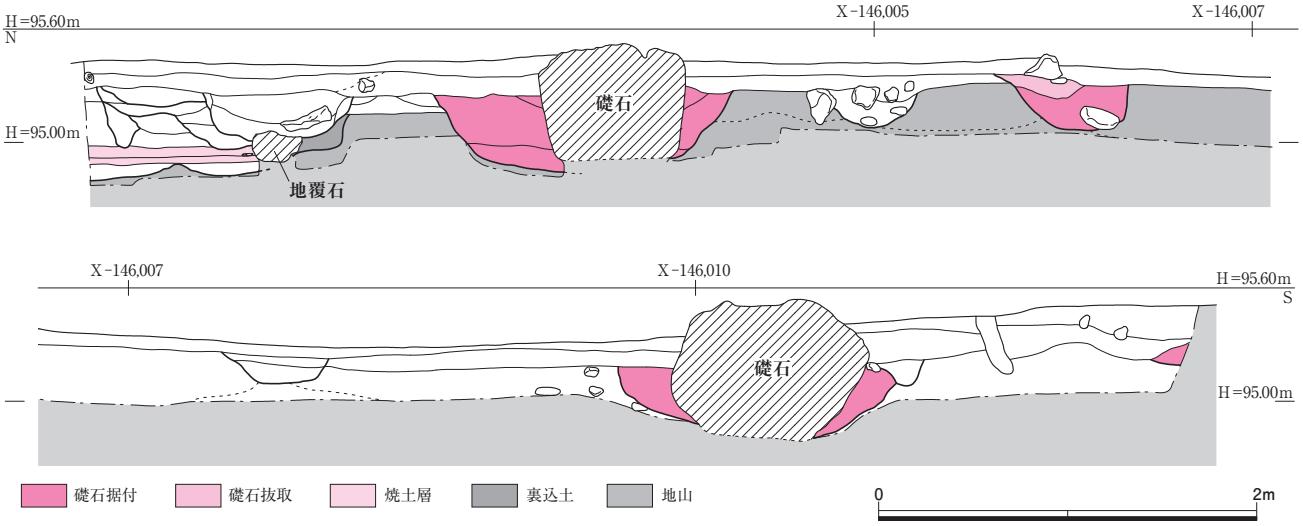
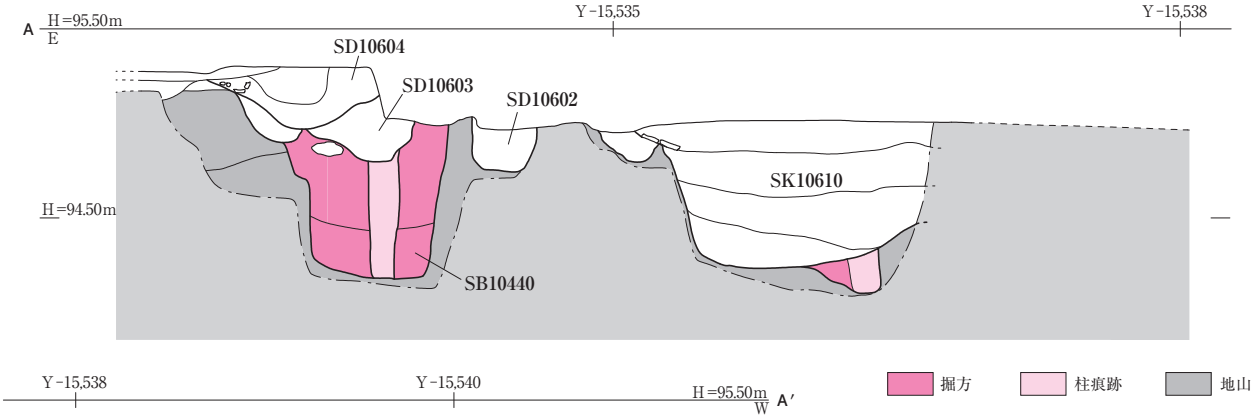


図300　第540次調査Ａ区南北畦西壁断面図　１：40



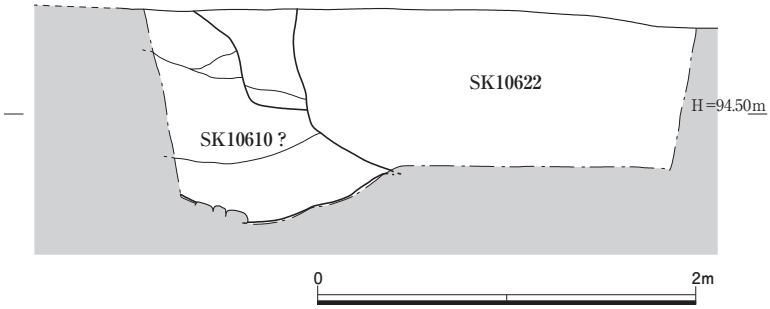


図301　第540次調査Ａ区A-A’ライン断面図　１：40

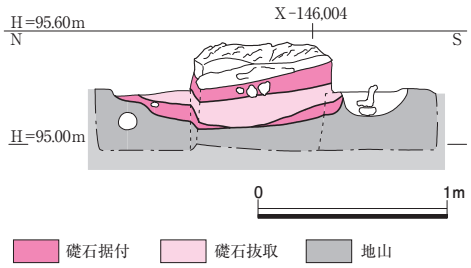


図302　第540次調査Ａ区八・十一礎石断面図　１：40

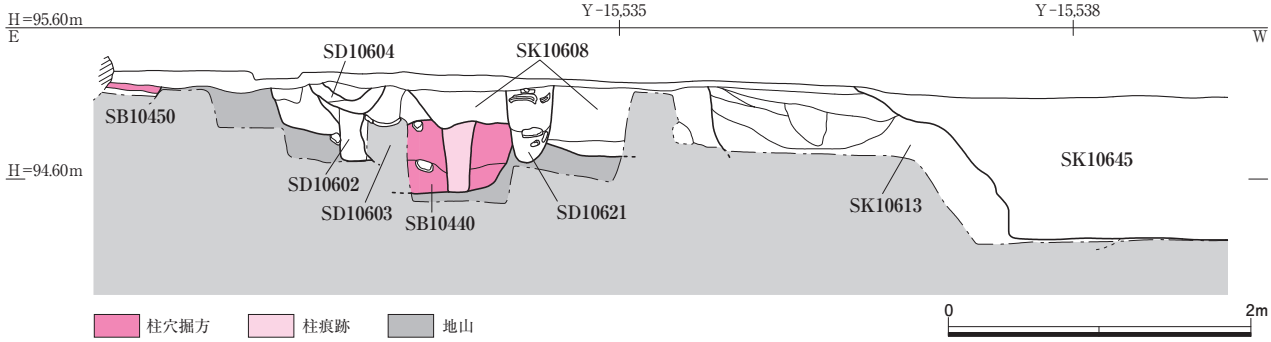


図303　第540次調査Ａ区東西畦北壁断面図　１：50

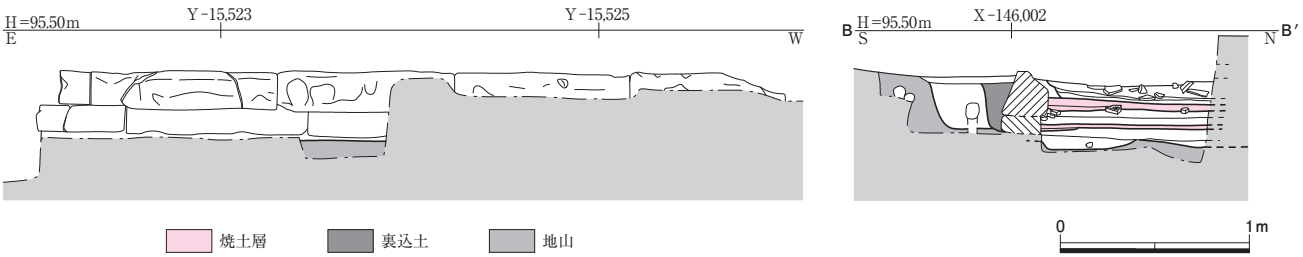


図304　基壇外装立面図（左）および基壇外装周辺土層図（右）　1：40

図305　西室大房基壇外装（北東から）

間柱の柱穴掘方は一辺0.5～0.8mで、深さは検出面から約40cmである。親柱の柱穴では柱痕跡を残す（図301・303）。いずれの掘方からも遺物は出土していない。この建物の東側柱筋と、SB10450の西側柱筋との間の距離は約2.5mである。

②2期

礎石建物SB10450は存続し、その西方に南北溝４条、円形土坑１基、土坑20基以上が展開する。

南北溝SD10601～10604　SB10450の西方２～３mに南北溝を４条検出した。SD10601は瓦暗渠で、調査区北端付近で東に斜行する。それ以外は素掘溝である。幅40～50cm、深さ20～40cm。これらの南北溝は、いずれもSB10450基壇の西北隅付近で基壇に沿って折れる様相が認められないため、地覆石の抜取穴や据付穴とは考えにくい。掘立柱建物SB10440廃絶後にSB10450の雨落溝や同囲の排水溝などとして機能していたと考えられる。

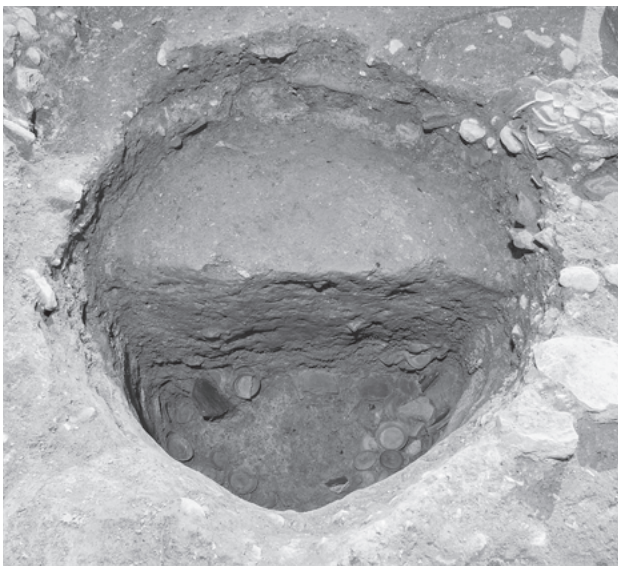
円形土坑SK10600　径約1.2m、深さ約2.5mのほぼ正円形の土坑。埋土は大きく複数の単位に分けられ、検出面より50cm下から底面までの約２mの間に、数枚の砂層を挟んで、14世紀前半に位置付けられる赤土器を多量に含む（図306）。土坑の底面には平瓦を数枚敷く。井戸の可能性もあるが湧水はなく、廃棄土坑として利用されたと考えられる。

土坑SK10605～10625　南北溝SD10601～10604よりも西には、土器や瓦を多量に含む廃棄土坑群が広がる。大きなもので径10m以上、深さ1.5m以上、小さなもので径40cm前後と多様である。調査区中央では土器の廃棄土坑が多く、西方では瓦の廃棄土坑が多い。また、SK10610とSK10622は調査区南西部の一帯に広がる土坑あるいは整地で、深さは両者とも1.5m以上ある。土坑は複雑に重複し、全体の把握は困難だが平安時代から江戸時代にかけて断続的に掘削が繰り返されていたとみられる。調査区西部のSK10619やSK10620からは、奈良時代から平安時代の瓦や土器が出土した。また、調査区中央部の土器の廃棄土坑SK10605は、平安時代中頃に位置付けられる。これらが最も古い土坑群で、特に後者は掘立柱建物SB10440の廃絶年代にも関わる。その他の土坑で年代がわかるものには、SK10613（17世紀前半）がある。

③3期

方形土坑４基、土師器廃棄土坑１基、竈５基、埋甕土坑11基、長方形土坑１基、近世道路がある。

方形土坑SK10630～10633　方形土坑を４基検出した。SK10633は調査区の北端にあり、さらに北に続く。またSK10632は長方形土坑SK10645に壊されているため、部分的な検出にとどまる。両土坑とも一辺1.8m前後の方形で、深さ約30cm。SK10630は、一辺2.6m前後のほぼ正方形で、深さは約40m。３回の改修が認められる。形態は竪穴建物状で、白色粘土の貼床をもつ。詳細に調査した最も新しいものでは、貼床とその下の多量の土師器を重ねて埋めた土器敷きを確認し、貼床を掘り込む小穴を４基確認した（図307）。小穴はいずれも径15cm前後、深さ10cmほどで柱穴かどうか判然としない。貼床と土器敷きは２時期分が認識できる（図309）。上層の貼床は厚さ10cm前後、土器敷きは厚さ５cm前後で、下層の貼床は厚さ15cm前後、土器敷きは厚さ10～15cmである。土坑埋土および土器敷きの土器の年代は、いずれも17世紀後半から18世紀前半である。この年代観によると、SK10630の廃絶は、西室大房焼失の年代（1717年）よりも前である可能性がある。SK10631は長軸約2.1m、短軸約1.9m、深さ約0.9mで、他の方形土坑より深い。これらの方形土坑からは、土器が比較的多く出土するのみである。方形土坑相互の形態が少しずつ異なるのですべて同じ性格とはいい難いが、一辺1.8～2.6mという規模や、あきらかに床面を意識したSK10630の状況から、何らかの貯蔵施



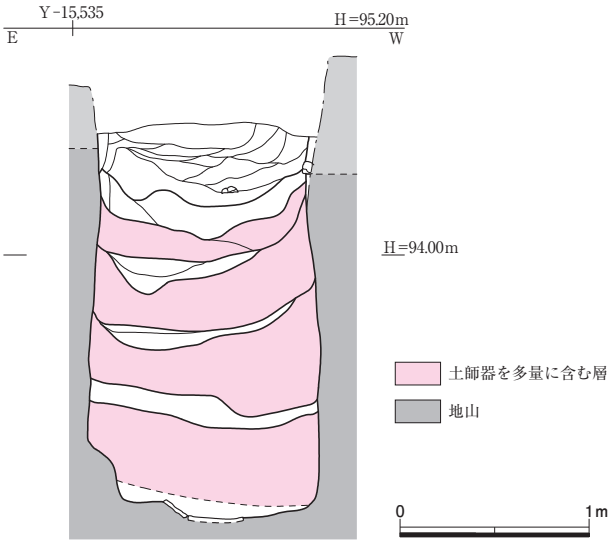


図306　円形土坑SK10600土師器投棄状況（左）と断面図（右）　1：40

図307　方形土坑SK10630（西から）

図308　竈SL10635～10637と土師器廃棄土坑SK10634（北から）

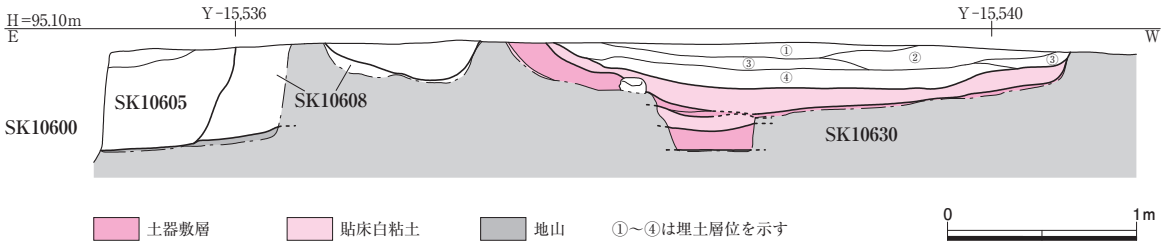


図309　方形土坑SK10630とその周辺の断面図（北から）　1：40

設と推察される。

土師器廃棄土坑SK10634　径約1.5m、深さ30㎝程度の円形土坑。完形の土師器が多量に出土した（図308）。廃棄土坑と考えられる。土師器は18世紀中頃のものと考えられる。

竈SL10635～10640　調査区北端付近で６基確認した。これらのうち、SL10638～10640は西室大房SB10450の基壇外装を壊す。竈の平面は長軸0.7～0.9m、短軸0.5～0.7mの小楕円形で、一端が開き、この部分が焚口と考えられる。底面には木炭片が広がり、側壁は被熱により赤化する。ただし、側壁の立ち上がりは後世にほとんど削平されている。形態的には大きく次の２つに分かれる。すなわち、竈SL10635・10636は、それぞれ２基が一連となり、平面形状がメガネ状になる。SL10638～10640はそれぞれ１基単独である。両者は、焚口と煙り出しの方向が異なり、前者はその方向が西→東（SL10635・10636）と南→北（SL10637）があるのに対して、後者は西→東のみである。前者の２連竈は、SL10637が新しい。

埋甕土坑群SX10641～10643　調査区の西南部で確認した。11基検出し（１基は調査区南壁にかかる）、３基から４基を１単位とし、南北に並ぶ。土坑の大きさは、径0.5～0.8m、深さ30～50㎝で、うち２基から陶質の甕が出

土し、１点はほぼ完形であった。

長方形土坑SK10645　調査区の中央やや北寄りで検出した。長軸約5.5m、短軸約1.1m、深さ約1.2mで、長軸が北西―南東方向に向く。短軸は緩やかな傾斜で立ち上がり、斜面を階段状に成形している。底面には瓦片を敷く。同形態の土坑は、第516次調査でも２基検出している。出土遺物にガラス瓶など近現代の遺物を含む。太平洋戦争時の防空壕と考えられる。

近世道路SF10644　調査区の東端部に北東―南西方向の斜行溝２条と、これに挟まれる小礫敷面を検出した。これは「奈良町絵図」(19世紀前半）などの資料から北円堂への参道と考えられる。　**（芝康次郎）**

出土遺物

土器・陶磁器　整理用コンテナに約80箱の土器・陶磁器が出土した。平安・鎌倉時代に遡る遺物も少数認められるが、多くは江戸時代のもので、特に土師器皿が目立つ。以下、主要遺構からの出土品について記す（図310)。

土坑SK10620出土土器　土師器皿（１～４）のほか、白色土器の椀（５）と緑釉陶器の小片（６）が出土した。土師器皿には、口縁部が「て」の字状とも形容される独特の形状を呈する一群（１・２）と、外反する一群（３・４）があり、後者には口径15cm前後の大型品と口径11cm前後の小型品が認められる。緑釉陶器は器形を特定することが難しいが、内面が二次的に被熱していると見受けられ、香炉の体部と推定される。土師器皿の形態的特徴から、11世紀末ないし12世紀初頭頃の遺物群と考えられる。

土坑SK10605出土土器　土師器皿（７～12）を主体とするが、少量の瓦器椀・皿をともなう。土師器皿は、基本的に口縁部外面に２段のナデ調整が施されているもので、口径15cm前後と口径11cm弱の大小２群に法量分化する。SK10620出土品と比べると、概して口縁部が内彎する傾向にあり、後出的要素が強く認められるが、外反する口縁部を有する個体も少数含まれている。12世紀前半頃のものと考えられる。

円形土坑SK10600出土土器　南都の中世土師器に特徴的な、赤褐色の胎土を有する皿（13～30）がまとまって出土した。径高指数（口径÷器高×100）25未満の浅手の一群（13～28）と、径高指数30前後の深手の一群（29・30）に大別でき、浅手の一群は口径９cm前後と口径12cm前後の大小２群に法量分化する。深手の一群にも口径10cm前後の小型品と、口径12cm弱の大型品があるが、浅手の一群と比べて極端に個体数が少ない。胎土の上で顕著な違いは認められず、いずれも口縁部外面に１段もしくは２段のナデ調整を施す点で共通するが、深手の一群は全般的に丁寧に作られている。暦年代を推定させる共伴遺物を欠くが、土師器皿の様相が近似する奈良市教育委員会平城京第559次調査SK638・639出土品[3]の中に、京都近郊産と目される土師器皿がともなっていることが手がかりとなる。SK638・639出土の京都近郊産土師器皿は、貞和元年（1345）に光明天皇から寺地を賜り、京都六条堀川に創建された本國寺の造営に際して埋められたと考えられる平安京楊梅小路南側溝出土品[4]との類似性が高く、概ね14世紀前半のものと考えられるので、SK10600出土土器についても、ほぼ同時期のものと考えることが許されよう。

方形土坑SK10630出土土器　４層に分かれる埋土のうち、ほとんど遺物を含まない③層を挟んで、下層の④層と上層の①・②層からの出土があり、複数個体で破片が接合できた①・②層出土品については一括する。④層出土品には、土師器皿（31～35)・肥前地域産の白磁碗（36)・鉄釉壺（37)・信楽焼の擂鉢（38)・瓦器擂鉢（39）があり、①・②層出土品には、土師器皿（40～44)・肥前地域産の施釉陶器碗（45・46）と染付磁器碗（48)・信楽焼の擂鉢（47）などがある。31・34は灯明皿として用いられたらしく、口縁部に煤が付着している。①・②層出土の土師器皿は、口径がやや小型化している点に④層出土品よりも年代的に後出する要素を見いだすことができるが、共伴した陶磁器に際立った年代差は認められない。①・②層から出土した信楽焼擂鉢（47)、内野山窯系の緑釉陶器碗（45)、高台内に「冨永」の印銘をもつ京焼風陶器碗（46）といった国産施釉陶器類は、宝永５年（1707）の大火にともなう整地層に覆われていた平安京左京北辺四坊穴蔵SF1387出土品[5]と高い共通性を示しており、18世紀初頭頃のものと考えられる。なお、図示していないが、SK10630の貼床下からは大量の土師器皿が出土しており、形質的には④層出土品との近似性が高いように見受けられる。

土坑SK10634出土土器　ほとんどが土師器皿（49～63）で占められているが、肥前地域産の白磁碗（64）などがわずかにともなう。土師器皿の胎土は、概して緻密で、

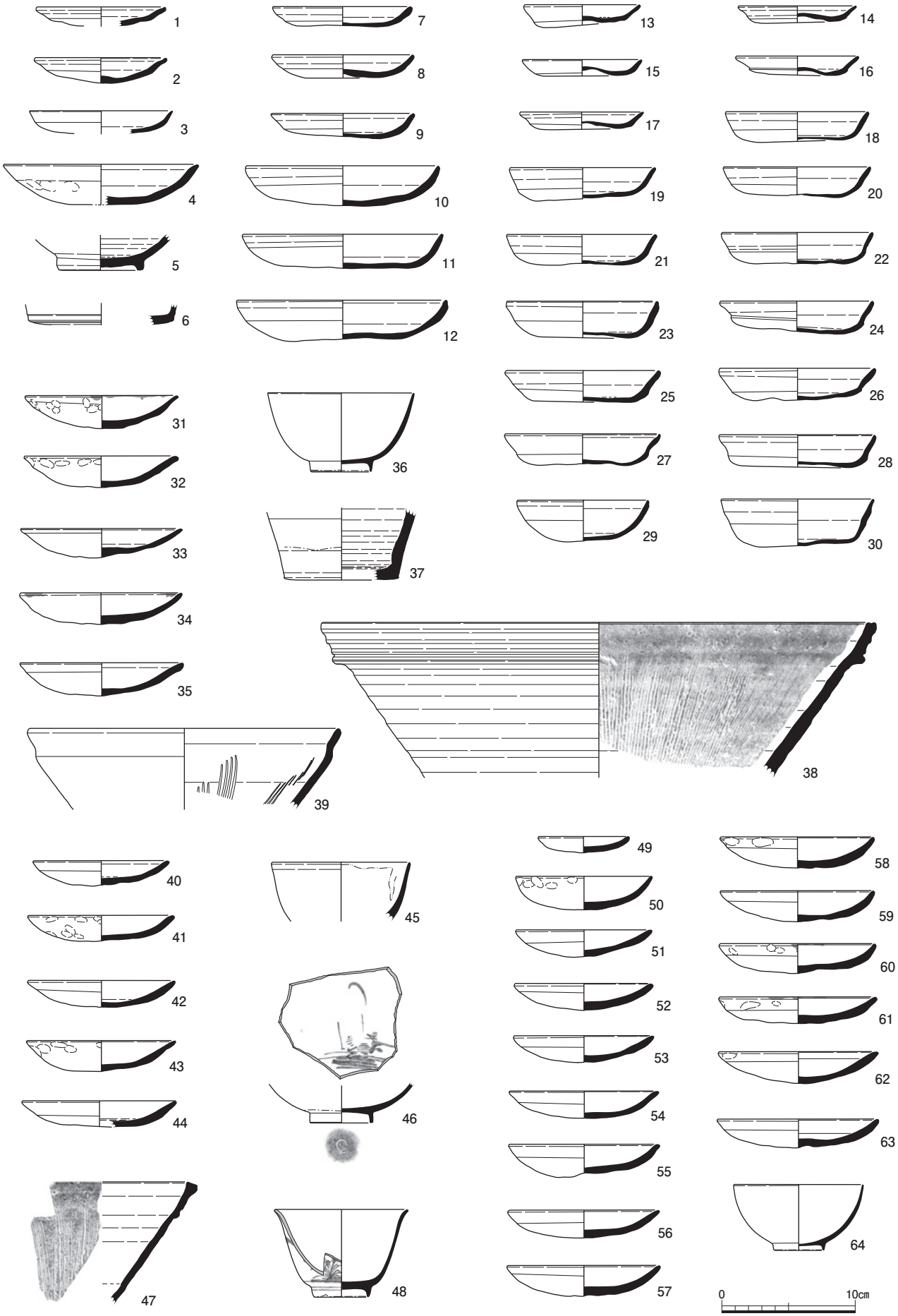


図310　第540次調査Ａ区出土土器　１：４

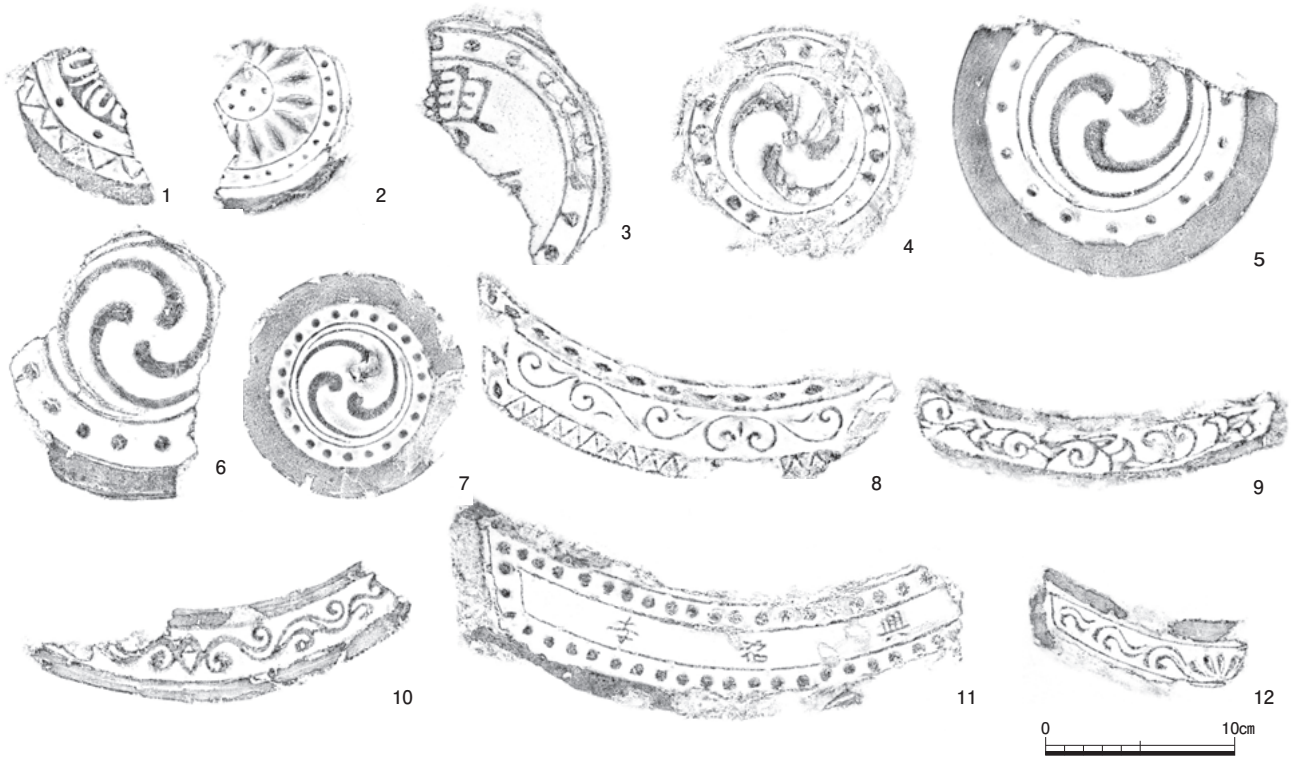


図311　第540次調査Ａ区出土軒瓦　１：４

淡い黄橙褐色を呈するものが多い。法量的には、口径７㎝前後の小型品、口径10.5㎝前後の中型品、口径12㎝前後の大型品に分けることができ、大型品の口径は方形土坑SK10630の①・②層出土品に近似するが、口縁部内面に残るナデ痕跡の幅が極端に狭くなっている点に違いを見いだすことができる。伴出の白磁碗も、SK10630④層出土品と比べると、全体に浅手で、高台も低いなど、伊万里焼とも呼ばれる肥前地域産の磁器碗としては、18世紀半ば以降の特徴を示す。　**（尾野善裕）**

瓦磚類　古代から近世の瓦磚類が出土した。中世の瓦が主体であり、奈良時代のものは少ない。また、出土した軒瓦の型式は分散しており、いずれの時期においても西室で用いられた軒瓦の組合せは特定できなかった。

図311の１～７は軒丸瓦。１は複弁蓮華文。外区に線鋸歯文と珠文を配す。平安時代前期。２は単弁蓮華文。外縁が素文で外区に珠文を配す。平安時代前期。３は鎌倉時代の「興福寺」銘軒丸瓦。１～３は興福寺食堂の調査で同笵出土例がある。４～７は左三巴文軒丸瓦。４は中央に珠点をもつ。平安時代末から鎌倉時代。５～７は鎌倉時代から室町時代。８～12は軒平瓦。８は6671Ａ。奈良時代初頭の興福寺の創建瓦である。９は植物文軒平瓦。平安時代。10は均整唐草文で中心飾りに菱形の文様をもつ。平安時代後期。11は「興福寺」銘軒平瓦。10・11は興福寺食堂の調査で同笵出土例がある。12は均整唐草文で中心飾りに半裁した蓮華文をおく。室町時代。

出土位置に関しては、１・８が土坑SK10621、３は土坑SK10614、６・９・12は方形土坑SK10630、10は土坑SK10618、11は竈SL10638（竈内に廃棄）、それ以外は、中世以降の整地土から出土した。　**（石田由紀子）**

金属製品・銭貨　鉄釘が51点出土した。いずれも小片で、頭部形状がわかるものはほとんどない。遺構に関わるものとして、土坑SK10618から鉄角釘２点、土坑SK10621から鉄角釘２点、円形土坑SK10600から鉄角釘１点、SK10630から鉄角釘２点、鉄丸釘10点、SK10632から鉄角釘11点、鉄丸釘２点がある。また、包含層からではあるが、銅製の垂木先金具片と思われる板状品が１点出土した。長さ約３㎝程度で、全体形状は不明である。銭貨では、SB10450の礎石（ニ・十一）の周辺で寛永通寶６点と崇寧通寶１点が出土した。　**（芝）**

ま と め

礎石建物SB10450（西室大房）の規模の確定　西室大房の建物規模および基壇の南北規模があきらかとなった。建物は、桁行10間、梁行４間の南北約62.5m（212尺）、東西約12.4m（42尺）の南北棟礎石建物である。梁行の柱間寸法は中央２間が約3.2m（11尺）でそれ以外が約3.0m（10尺）、桁行の柱間寸法は、南２間分が約4.8m（16尺）で、それ以外が約6.6m（22.5尺）である。『紀要 2014』では、梁行規模を2.95m（10尺）等間と報告していたが、今回の調査成果では、上述の規模とするのがより正確である。基壇規模は南北が約66.5m（225尺）で、基壇の出は南北それぞれ約1.9m（6.5尺）である。東西の基壇規模は不明だが、東面の基壇の出は、南北両面と同様に約1.9

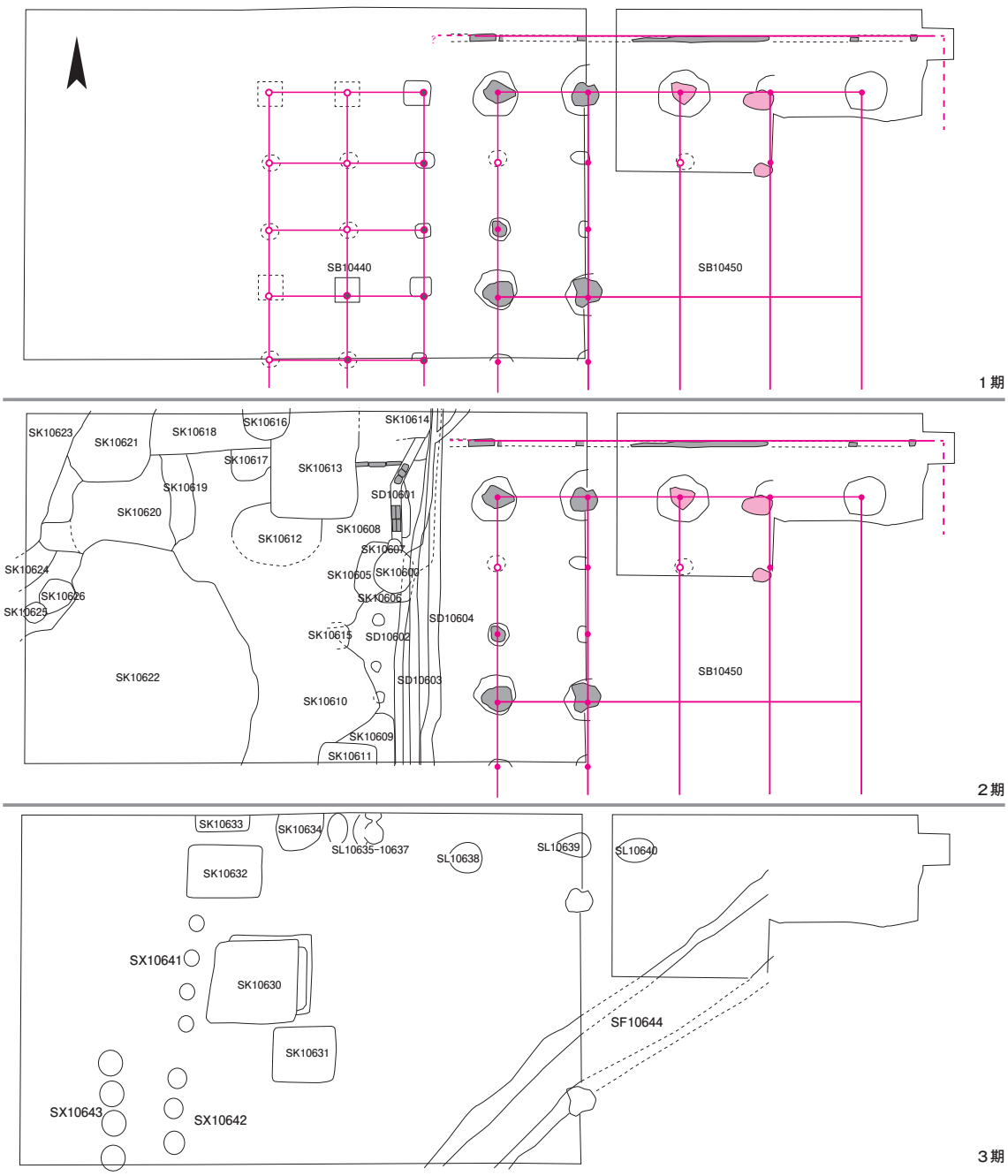


図312　第540次調査Ａ区遺構変遷図

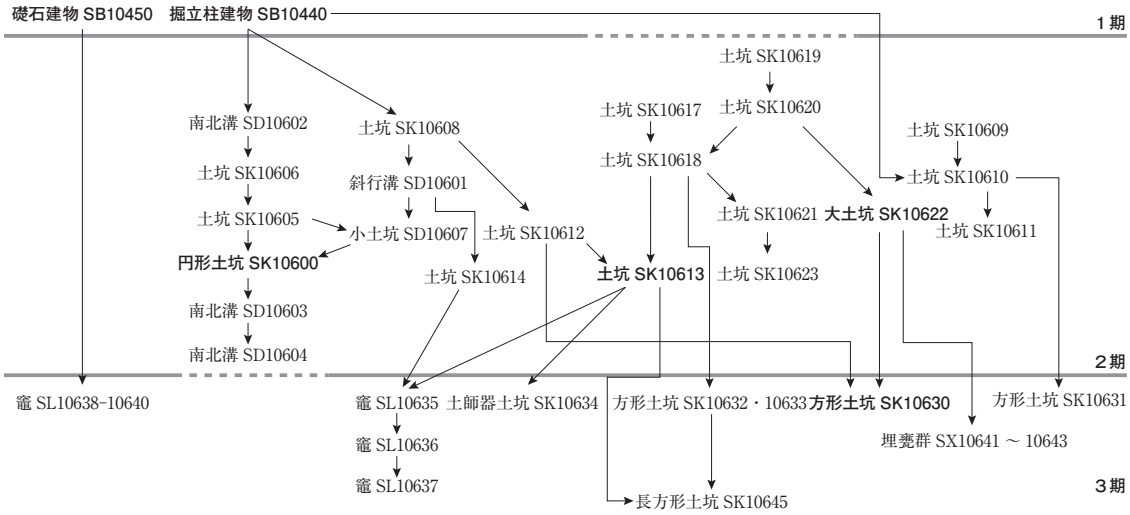


図313　第540次調査Ａ区遺構変遷図（遺構番号）

m（6.5尺）である可能性が高い。

掘立柱建物SB10440の確認　西室大房SB10450の約2.5m西に並列して掘立柱建物SB10440を確認した（図312上）。今回の調査区では、後世の土坑群あるいは整地で削平を受け、規模の確定は難しいが、第516次調査の成果をあわせると、桁行10間、梁行２間である可能性が高い。建物の位置や規模から小子房の可能性が考えられるが、SB10450に近接しすぎており、一般的な大房と小子房の関係と異なる点に問題を残している。

掘立柱建物SB10440廃絶後の遺構群の確認　SB10440の柱穴に重複する土坑の年代からは、平安時代末（12世紀後半）にはSB10440は廃絶したことが確認され、その後、西室大房の西方には瓦や土器の廃棄土坑群が形成される。調査区の中央部には土器の廃棄土坑が多く、調査区西方には瓦の廃棄土坑が多い。これらは重複関係から図312・313のように変遷し、出土遺物から平安時代後半から江戸時代前半に位置付けられる。

近世遺構群の確認　西室大房SB10450の焼失（1717年）に前後して、竈や方形土坑、埋甕などの施設群が造られる（図312下）。方形土坑は何らかの貯蔵施設と考えられる。これらの遺構群からの出土土器は概ね18世紀以降のものであるが、方形土坑SK10630の出土土器の年代観によると、その構築がSB10450焼失を遡る可能性もある。いずれにしても、こうした近世遺構がまとまって検出されたことはなく、享保年間に大部分の堂宇が焼失して以降の境内の様相を知る上で貴重な成果といえる。　**（芝）**

３　北円堂院回廊の調査

調査の目的と経過

2011年に、北円堂の南面・東面回廊および北面回廊の階段部分周辺を調査しており（第483次）、回廊の礎石抜取穴、据付穴、基壇外装およびその抜取溝などを確認している[6]。第483次調査では、北面回廊の東半部（桁行４間分）について、カシやマツの大樹があったため調査をおこなっていなかった。しかし、復元整備にともなって樹木を伐採したところ、樹根付近の北面回廊礎石推定位置に安山岩の巨礫が顔を出していたため、未調査部分の調査をおこなった。

地形と基本層序

基本層序は調査区の東西で異なる。東部では、上から表土、暗褐色砂質土、地山（明褐色砂礫土）となるが、西は、暗褐色粘質土の下位に褐色粘質土、黄褐色粘質土と砂質土が互層となる基壇版築土、暗褐色粘土を複数重ねた造成土が続き、地山（赤褐色砂質土）となる。表土から地山までの高さは調査区東方では約30㎝であるのに対して、調査区西方では約1.9mであり、地山は西に向かって大きく標高を下げる。この傾斜変換点は、Y＝－15,574付近である。遺構検出面の標高は約94.9mである。

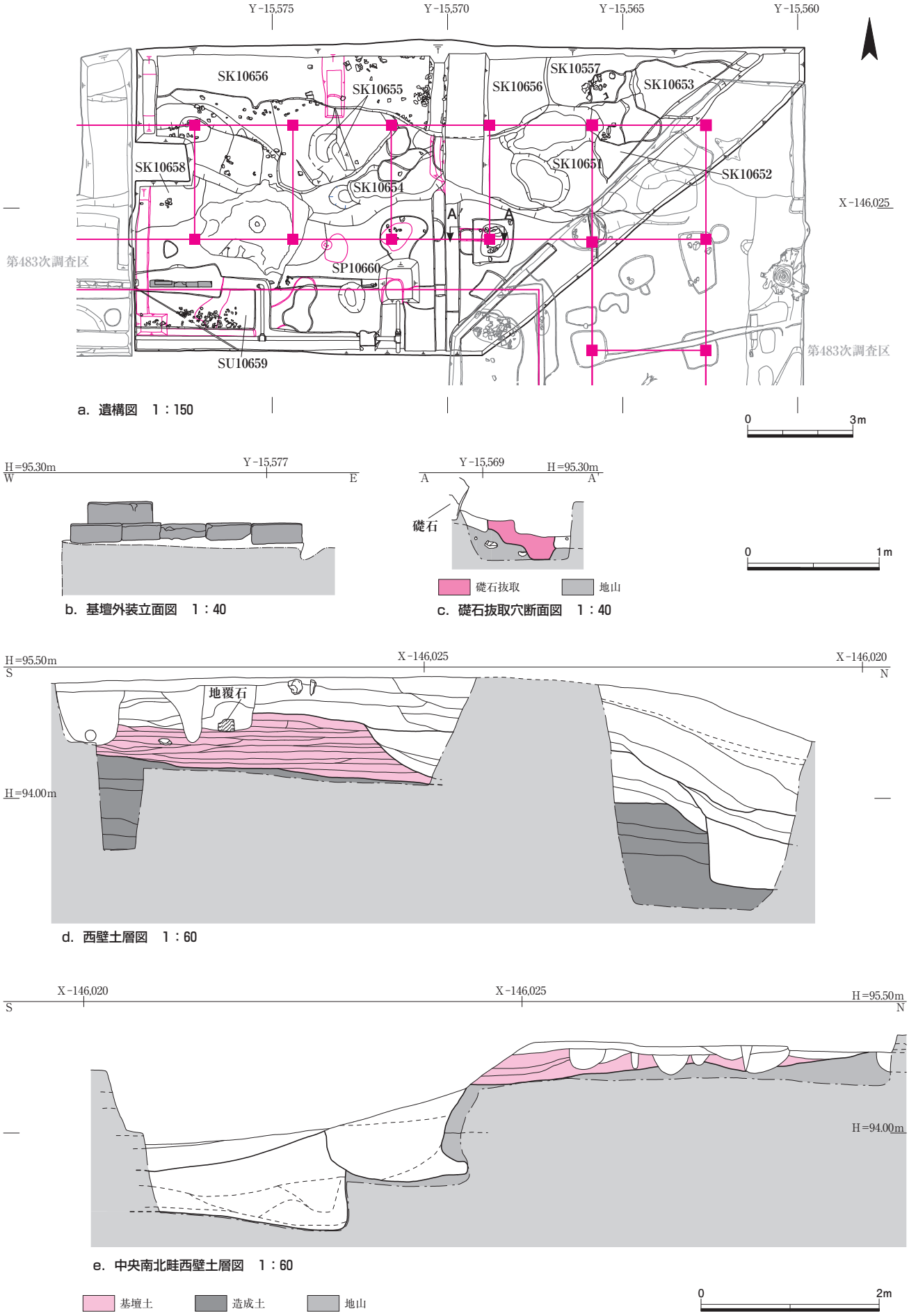
検出遺構

今回の調査では、北円堂院北面回廊および近世・近代の土坑群10基を検出した（図314-a）。

北面回廊SC9955　存在を想定していた８基の礎石抜取穴のうち、検出したのは南側柱の２基（SP10660・10661）で、南側柱の残り２基はカシ樹根下あるいはその近くにあり、検出できなかった。また、北側柱のすべての礎石は後世の土坑群に壊され、確認できなかった。調査前に樹根付近にみえていた安山岩巨礫は、ほぼ礎石想定位置にはあるものの、後世に動かされた痕跡が認められた（図314-c）。検出した抜取穴の平面形はほぼ円形で径0.6×0.8mほど、深さは検出面から約20㎝。抜取穴からは瓦片が少量出土した。２基の柱間寸法は、従来の想定どおり9.6尺とみられる[7]。

基　壇　基壇築成の方法は、調査区の東西で異なる。東半では、基本的に地山の明黄褐色礫混じり土を削り出して造る。一方、西半ではこの地山が西に向かって急激に標高を下げる。調査区の西端では、GL-1.9m（標高93.4m）で地山を確認した。この地山上に、褐色土や暗褐色土などを比較的厚く積む（約1.1m）。その後、地覆石よりも約１m外側まで版築を施し、地覆石を据えたのち基壇の高まり部分に版築をおこなう（図314-d）。掘込地業は施さない。基壇部分の版築は、黄褐色粘土と黄褐色砂質土が５㎝ほどの厚さで互層となる。基壇版築の総厚は最も残存する調査区西端で約0.7mである。後述する近世以降の土坑群によって基壇北半は完全に壊されている。

基壇外装　基壇外装は北面回廊南面の一部で、地覆石と羽目石を確認した（図314-b・315）。これは1975・76年の境内防災設備工事にともなう発掘調査で確認していたもので、今回は再検出となる。地覆石は５石、羽目石は１石残り、前者は幅30～50㎝、奥行15～20㎝、成12～15



a. 遺構図　1：150

b. 基壇外装立面図　1：40

c. 礎石抜取穴断面図　1：40

d. 西壁土層図　1：60

e. 中央南北畦西壁土層図　1：60

図314　第540次調査Ｂ区（北円堂北面回廊）遺構図・土層図・立面図・断面図

図315　北面回廊基壇外装検出状況（南西から）

図316　北面回廊北半を壊す近世土坑群検出状況（北西から）

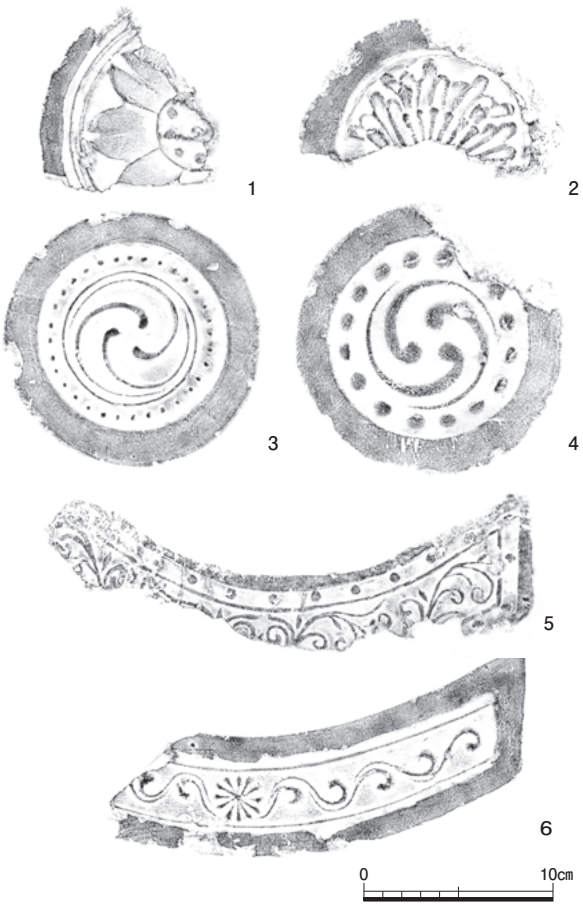


図317　第540次調査Ｂ区出土軒瓦　１：４

cm、後者は１石が幅48cm、奥行12cm、成18cmである。いずれも地獄谷産凝灰岩の切石を用いる。これらの切石が残っていない部分では、抜取溝を確認した。しかし、地覆石の破片らしき凝灰岩片が残存する部分では、据付痕跡を確認できなかった。これは、上述のように基壇築成の過程で溝などを掘らずに地覆石を据えたためと考えられる。

瓦溜SU10659　調査区西南部の基壇外装の南で検出された。基壇土の土層で検出し、径３ｍ程度の範囲に瓦がまばらに広がる。中世の土師器や瓦器を含む。

近世・近代の土坑群SK10651～10658　調査区北半に大小10基の土坑を検出した（図316）。大きなものは、調査区外にのび、深さは約２ｍに達し、小さなものは１ｍ前後、深さ0.5ｍ程度で、これらが重複して掘られている。これらには多量の土器と瓦を含む。特に、SK10651からは、多数の土器、瓦のほか、鉄釘などの金属製品、貝殻など食物残滓が出土した。遺物からこれらの土坑のほとんどは近世以降のものである。この上面には、大正年間の銭貨を含む造成土（黒色土）がのる。　**（芝）**

出土遺物

土　器　Ｂ区からは整理用コンテナに30箱あまりの土器・陶磁器が出土した。瓦溜SU10659などから、中世に遡る土師器や瓦器の細片が出土しているが、廃仏毀釈に関連して明治時代初期にまとめて廃棄されたとみられる陶磁器が圧倒的多数を占めている。　**（尾野）**

瓦磚類　多量の瓦磚類が出土した。瓦磚類は近世から近代にかけてのものがほとんどで、古代のものはごくわずかである。特に土坑SK10651、SK10656からは近世から近代までの瓦が多く出土した。

図317の１は素弁蓮華文軒丸瓦。平安時代。２は興福寺一乗院所用の一乗院蓮華文軒丸瓦。３は左三巴文軒丸瓦。内区の巴文が非常に細く、外区の珠文も小さい。４は右三巴文軒丸瓦。２～４は江戸時代。５は均整唐草文軒平瓦。平安時代前期。６は均整唐草文で中心飾りに蓮華文をおく。室町時代。１が基壇上にのる包含層、２～４・６は土坑SK10656、５はSK10656の上にのる黒色土から出土した。　**（石田）**

金属製品・銭貨　近世土坑群から鉄釘などが出土した。遺構に関わるものとして、土坑SK10651からは銅キセル雁首１点、貝形銅製品１点、鉄角釘４点が、土坑SK10656からは鉄角釘28点、鉄丸釘３点、鉄鎹５点、鉄座金11点がある。図318は、貝形銅製品である。厚さ0.5㎜の銅板を用いて、イタヤガイ科の貝殻を模して作られたものと考えられる。中央右寄りに0.5㎜の小孔を２つ

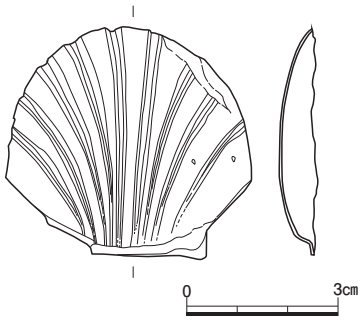


図318　第540次調査Ｂ区出土貝型銅製品　２：３

穿つ。緊縛用であろう。縦4.6cm、横5.0cm。

銭貨では、近世土坑群から延喜造寶１点、寛永通寶が３点、世高通寶１点出土した。また、近世土坑群の上にのる黒色土から一銭銅貨（大正11年）が出土した。　（芝）

動物遺存体　土坑SK10651やそれを覆う黒色土から、57点の動物遺存体が出土した（図319）。SK10651からはマシジミ13点、アカガイ６点、ハマグリ５点、シジミ科３点、アワビ属１点、バイ１点、種不明の巻貝１点を同定した。貝類以外にも、マダイの歯骨、種は不明であるが鳥類の上腕骨骨幹部が出土している。黒色土からはハマグリ10点、アカガイ８点、マシジミ３点、シジミ科２点、クロアワビ１点、アワビ属１点を同定した。出土した動物遺存体は食用とされる種ばかりで、鳥類の上腕骨には解体痕跡も多数認められたことから、食糧残滓と考えられる。大型の個体が多いのが特徴的であり、殻長12.1cmのアカガイや殻長13.5cmのクロアワビも認められた。マシジミ、ハマグリ、アカガイは貝合わせができる個体も多く認められ、廃棄単位の保存性が高いことが示唆される。また、SK10651と黒色土の動物遺存体は平面的に同じような場所から出土しており、様相も共通することから、同じ遺構に由来した資料群の可能性が考えられる。　（山崎　健）

ま と め

北面回廊基壇の造成過程が判明　北面回廊は、調査区の東半では地山削り出しで基壇を造るのに対して、西半では比較的厚い暗褐色粘質土を数回に分けて積んだ後、黄褐色粘質土と砂質土の互層からなる基壇土を版築によって築成していることがあきらかとなった。これらの造成は、造成土、基壇土ともに遺物をまったく含まないことから、少なくとも回廊創建時、すなわち北円堂創建時に遡る可能性が高い。地山の落ち込みの傾斜変換点は、北円堂基壇のやや東であり、北円堂創建にともなって大規模な造成と整地がおこなわれたと考えられる。

北面回廊の礎石抜取穴の確認　基壇上面では２基の礎石抜取穴を確認した。ただし出土遺物が少なく、抜き取られた時期を確定することはできなかった。北面回廊の柱配置や規模はこれまでの所見と変更がない。

図319　第540次調査Ｂ区出土貝類

北面回廊基壇北側の土坑群の確認　北面回廊の基壇北辺は、近世以降の土坑群によって大きく削平されている。これらの土坑群には、土器、瓦のほか、食糧残滓と考えられる貝などが出土した。出土遺物は大部分が19世紀中頃以降のもので、明治期の廃仏毀釈に関わるものと考えられる。　（芝）

３　北円堂南面の調査

調査の目的

先述のように、2011年度の調査（第483次）では回廊の調査を実施したが、その際、北円堂院南面内庭部は未調査であった。今回の調査では、灯篭や参道の確認を目的として、北円堂基壇の階段幅で階段と回廊南門の間に約８×５ｍの調査区を設定した。

検出遺構

灯篭基礎据付穴３基、出庇の礎石４基、昭和の北円堂修理時の足場穴２基を検出した（図320）。参道の遺構は確認できなかった。

灯篭基礎据付穴SP10671～10673　北円堂南面に３基検出した。SP10671は南面階段の中軸ライン上にほぼのり、階段最下段の踏石南端から約3.2ｍ（11尺）の位置で検出した。またその他の２基は、SP10671と東西軸を揃え、SP10671から西に約2.5ｍの位置でSP10672を、東に約2.1ｍの位置でSP10673を検出した。位置と大きさから、いずれも灯篭の据付穴と考えられる。SP10671は径0.6×0.9ｍ、深さ25cm（図321）、SP10672は径0.6ｍ、深さ20cmである（図322）。SP10673は、調査当初に設定したサブトレンチにより、正確な大きさは分からないが、SP10672と

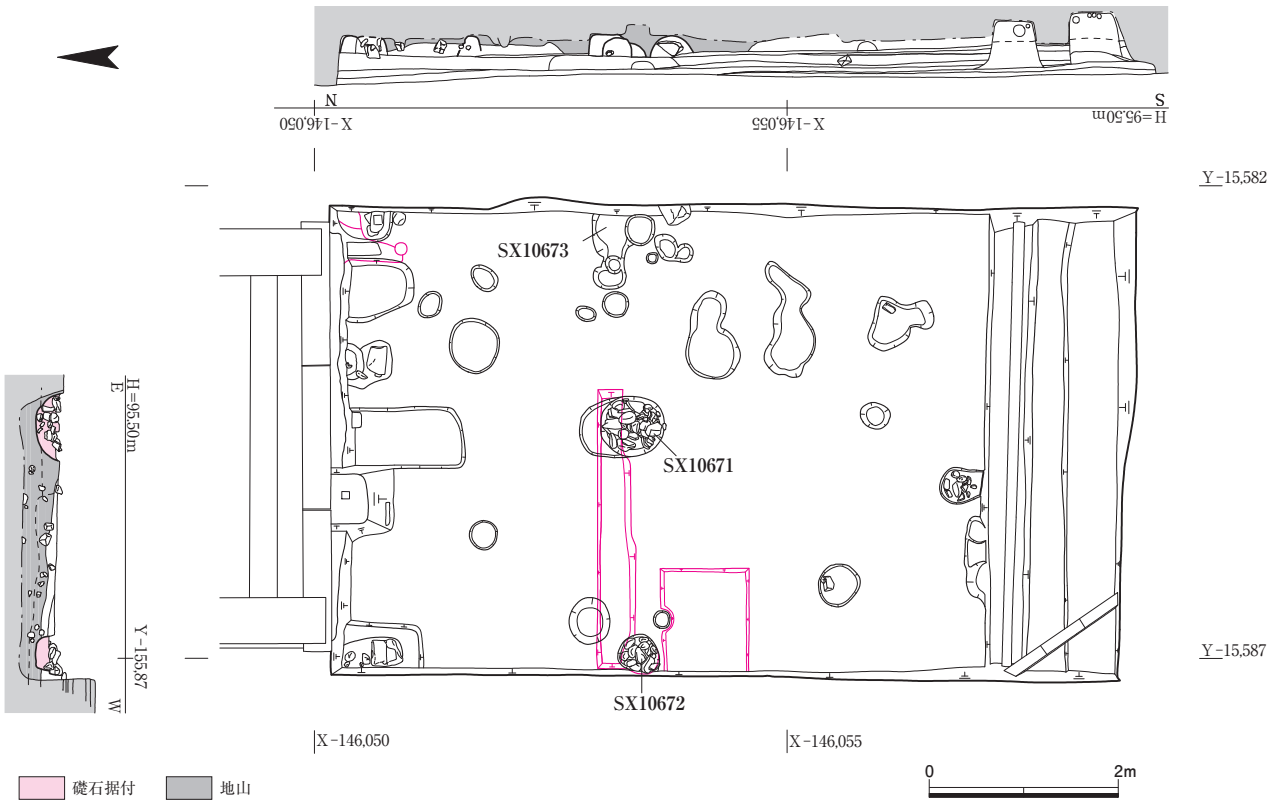


図320　第540次調査Ｃ区（北円堂南面内庭部）遺構図・土層図　１：80

図321　SP10671検出状況（北東から）

図322　SP10672検出状況（東から）

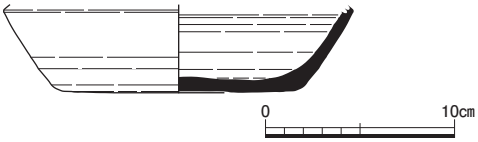


図323　第540次調査Ｃ区出土土器　１：４

図324　第540次調査Ｃ区出土軒丸瓦　１：４

ほぼ同規模と考えられる。３つの据付穴には径５～10㎝前後の円礫（花崗岩、チャート、流紋岩）が充填されており、SP10671からは奈良時代の須恵器平瓶が出土した。

その他、調査区北端には、出庇の礎石が東西に４基並び、そのやや南に北円堂修理時の足場穴と考えられる小穴が認められる。

出土遺物

土　器　整理用コンテナに２箱分の土器・陶磁器が出土したのみで、灯篭基礎据付穴SP10671から出土した須恵器（図323）以外にめぼしい遺物はない。SP10671出土の須恵器は、頸部を欠いているが平瓶とみられ、肩部に強い屈曲をもつ独特の形状から、奈良時代のものと考え

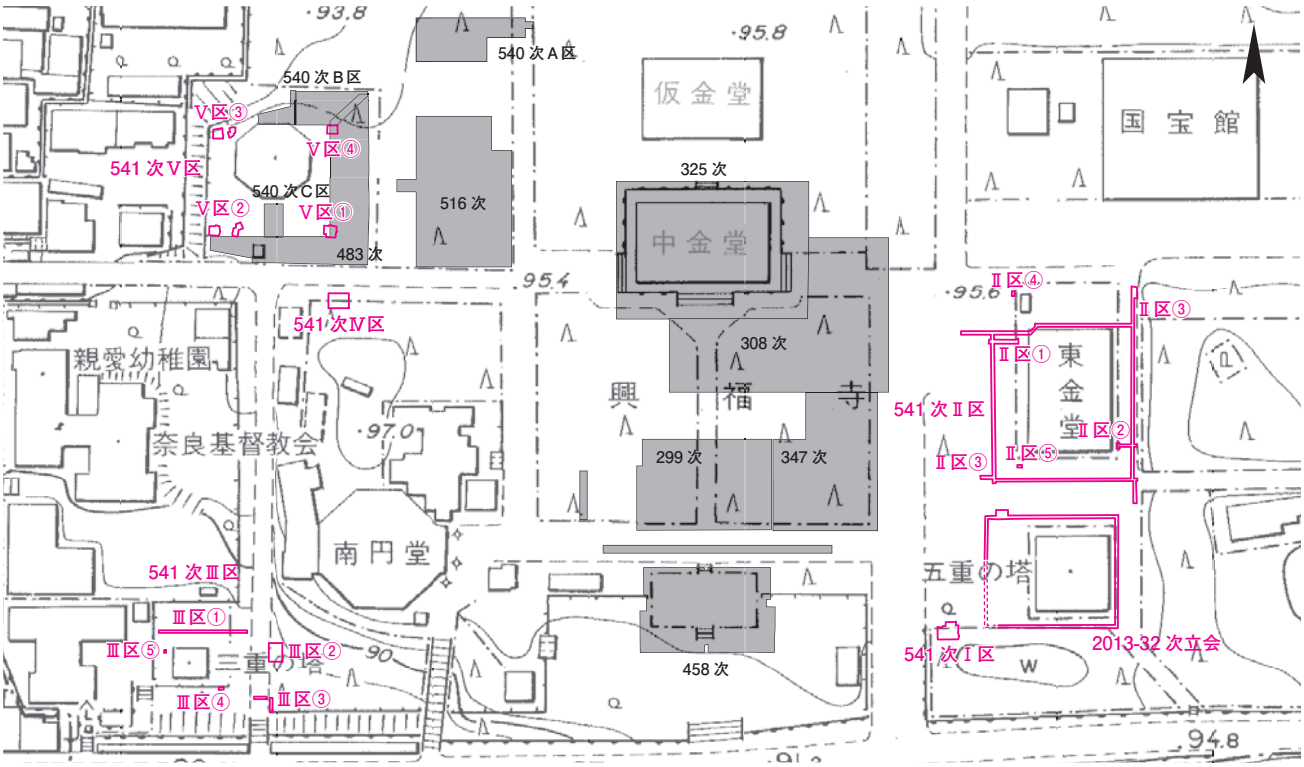


図325　第541次調査区・第2013-32次立会位置図　1：2000

られる。　（尾野）

瓦磚類　出土量は少なく、軒瓦に関しては遺構にともなうものはなかった。図324は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦。平安時代後期のもので興福寺食堂の調査でも同笵出土例がある。整地土より出土した。　（石田）

金属製品　鉄角釘３点、鉄丸釘25点が出土した。いずれも表土あるいは攪乱からの出土である。　（芝）

ま と め

北円堂南面に灯篭基礎据付穴とみられる小土坑を３基検出した。これらは北円堂南面階段の南端から約3.2mの位置に東西に並ぶ。これらは既存の資料などでは知られていないものだが、今回の調査により、北円堂院に灯篭が付属していたことがあきらかとなった。

４　境内防災工事にともなう調査

調査の概要と経過

興福寺では、2013年度以降、1970年代に設置した防災設備（放水銃やそれに水を供給する水道管など）の取り替えや新規放水銃設置にともなう水道管などの埋設といった工事（境内防災工事）をおこなっている。第541次調査は、この工事にともなうものである。工事には、既設管を撤去して同所に新規管を設置する工程と、新たに水道管などを埋設するため掘削をおこなう工程とがあり、調査は新規掘削となる箇所と、主として東金堂周辺の既設管撤去部分を対象とした。境内各所に合計十数ヵ所の調査対象地区が発生したため、それらを便宜的にⅠ～Ⅴ区に分割し、また①～⑤の枝番号を付した（図325）。調査面積は合計約270㎡で、2014年10月７日に調査を開始し、2015年２月12日に終了した。なお、2014年３月に工事立会として対応した際にも五重塔周辺で遺構を確認したため（第2013-32次）、あわせてここで報告する。

基本層序

いずれの調査区も、上から（ⅰ）表土、（ⅱ）現代の造成土、（ⅲ）中世以降の包含層、（ⅳ）地山、の順である。ただし、（ⅱ）と（ⅲ）の間に近世または近代の舗装（旧表土）、（ⅲ）と（ⅳ）の間に古代にさかのぼる可能性のある整地土層（地山由来の土による整地と目され遺物をほとんど含まない層）などが確認できるトレンチもある。

なお、北円堂周辺のⅤ区では、東側の①・④と西側の②・③とで土層が大きく異なるが、これについては「まとめ」で後述する。

五重塔周辺の検出遺構

五重塔南西のⅠ区において、排水設備SX10680を検出した（図326）。花崗岩製の会所枡１基（SX10681）と陶質の土管暗渠２系統（東西方向のSD10682および北東―南西方向のSD10683）からなる。SD10682の据付掘方埋土からガラス片が出土したことから、近代に属する遺構と考えられる。土管の接続法や土管上面の標高から、東から西に向かって水を流し、会所枡で屈曲させて南西方向に排水していたことがわかる。

会所枡SX10681は、平面が0.9×0.9mほど、高さが0.7mほどで、底石１枚・側石４枚・蓋石２枚からなる。い

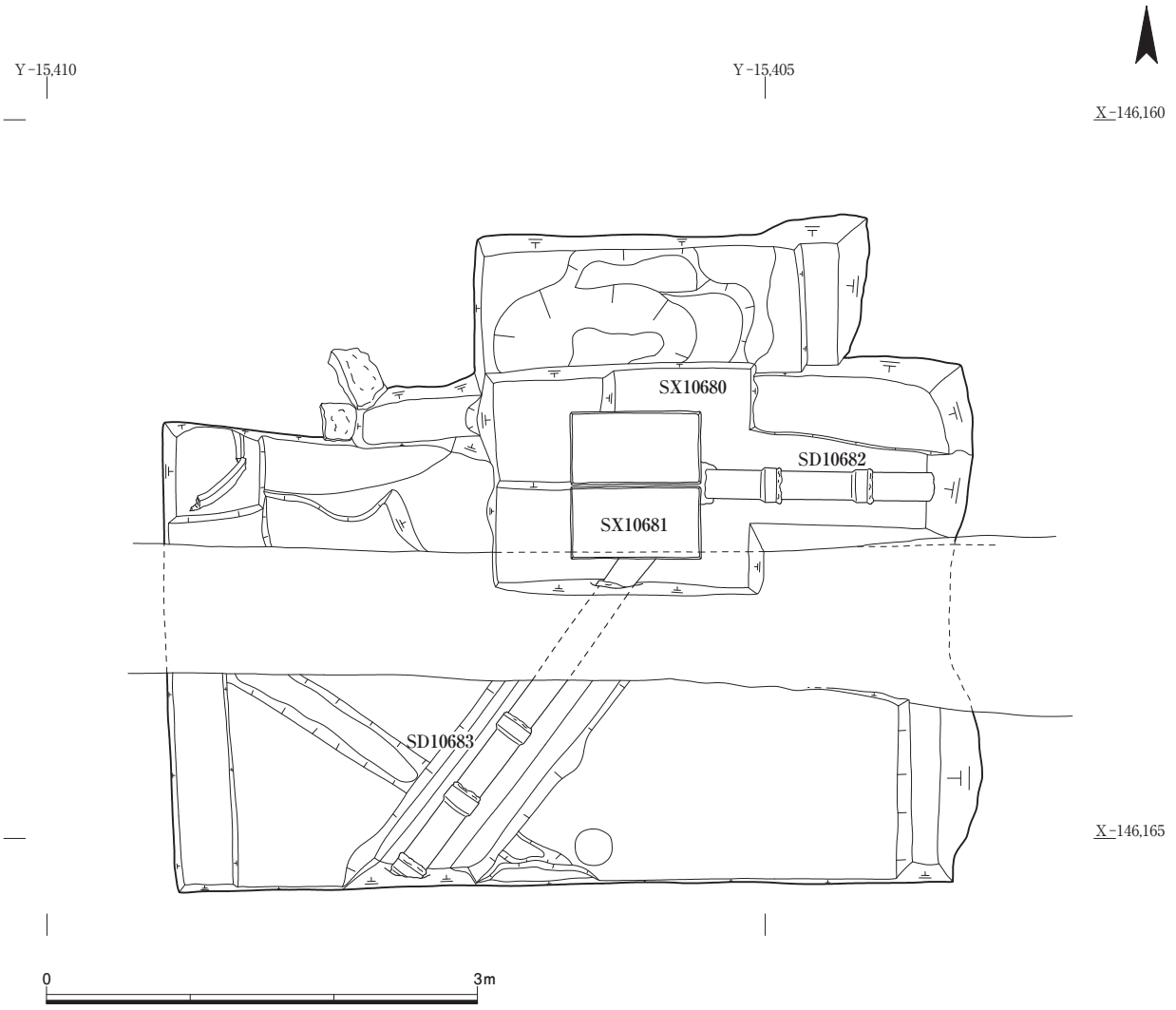


図326　第541次調査Ⅰ区（五重塔南西）遺構図　1：50

ずれも厚さは10cmほど。側石は左右両辺の上半または下半を切り欠く仕口を造る。目地はモルタルと思われる物質でふさいでいる。会所枡SX10681の上面はGL-1.2m（H=93.65m）ほどで、土管暗渠SD10682・10683の据付掘方はGL-2.0m（H=93.00m）ほどまで掘り込まれている。

土管暗渠SD10682・10683の土管は外径20cmほどで、1個の長さは0.6mほどである。SD10682は約1.7m分、SD10683は約2.8m分を検出した。土管どうしや会所枡SX10681との目地は、やはりモルタルとみられる物質でふさいでいる。

また、第2013-32次立会では、五重塔の東面にて南北柱穴列SA10711、南面にて東西柱穴列SA10712を検出した。いずれも既設水道管を撤去したのちに断面観察にて確認したものである。ともに柱間寸法は約3.6m（12尺）等間。SA10711の柱穴は6基、SA10712の柱穴は7基を確認した。いずれも砂利層（表土）直下の整地土層上面から掘り込まれており、近世後期以降に属すると思われる。柱穴の直径は40～60cmほどで、底面は未確認。SA10711・10712とも、五重塔を囲う一連の塀のような施設の一部であろう。

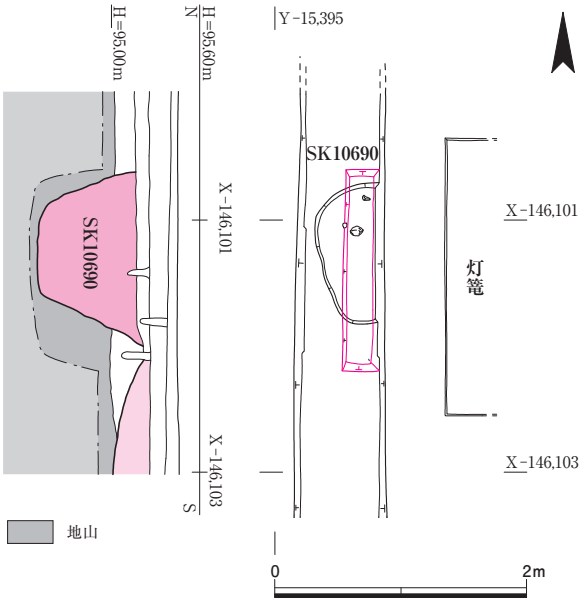


図327　第541次調査Ⅱ区③（東金堂西）遺構図・断面図　1：60

東金堂周辺の検出遺構

東金堂の四周をめぐるⅡ区③のうち、東金堂の東西中軸線の西延長上において、大型の土坑SK10690を検出し

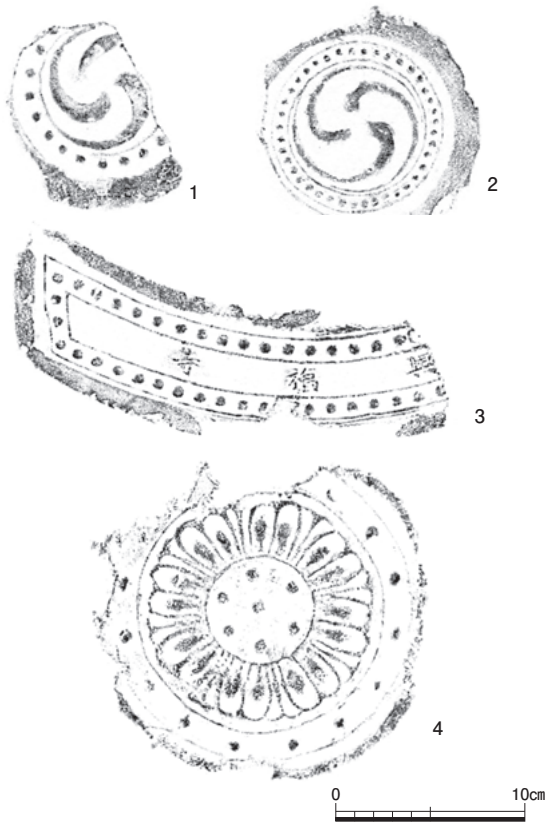


図328　第541次調査・第2013-32次立会出土軒瓦　1：4

た（図327）。検出面で、直径約1.4m、深さ約0.8mである。検出面の標高は95.10mほどで、地山由来の整地土とみられる黄灰褐色粘質土層を掘り込む。埋土から遺物は出土しておらず、時期は未詳。現在、SK10690の直上やや東側には東金堂に付随する灯篭が据えられており、これに先行する施設の遺構であると考えられる。**（山本祥隆）**

出土遺物

土　器　第541次調査では整理用コンテナ３箱分の土器が出土した。内訳は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器からなり、古代から近現代まで多岐にわたる。このうち三重塔北方のⅢ区①では、中世後半の土師器皿がまとまって出土した。これら土師器皿は、口径が７㎝前後、８㎝前後、10㎝前後の３種類が認められるほか、胎土の色調が赤褐色・灰白色・褐色と、こちらも３種類以上に分類が可能である。**（青木　敬）**

瓦磚類　第541次調査では軒丸瓦２点、軒平瓦１点のほか、丸瓦・平瓦が整理用コンテナ18箱分出土した。図328の１・２は鎌倉時代の右三巴文軒丸瓦。いずれも三重塔北のⅢ区①より出土。３は鎌倉時代の「興福寺」銘軒平瓦で、興福寺食堂で同笵出土例がある。北円堂南西のⅤ区②包含層より出土。また、第2013-32次立会では、奈良時代後半の軒丸瓦6235Ｊが出土した（４）。五重塔東南部包含層より出土。**（石田）**

ま と め

第541次調査および第2013-32次立会では、排水設備SX10680や柱穴列SA10711・10712、土坑SK10690などの遺構を検出した。これらはいずれも近世以降の時期に属するとみられるものの、既存の資・史料からは知られていなかったものであり、興福寺の歴史を考察するための貴重な資料といえる。

また、各調査区において、整地土層や地山面などを確認し、標高の測定や遺物の採取などをおこなった。さらに、東金堂周辺のⅡ区①・②や三重塔周辺のⅢ区③では、近世または近代に属すると思われる砂利敷きの舗装（旧表土）も検出した。これらは、興福寺境内の原地形や各時代の路面などを復原する際の重要なデータとなるであろう。

なお、北円堂周辺のⅤ区では、東側の①・④ではGL-40～50㎝（H=94.80m）で地山面を確認したのに対し、西側の②・③ではGL-1.8m（H=93.50m）ほどまで掘削したが、造成土層が厚く、地山面を確認できなかった。ここから、ちょうど現在の北円堂が建つあたりを境に、その西側（および北側）では地山面が急激に落ち込む地形であったことが推察される。あわせて、北円堂院、特にその西面・北面回廊は、大規模な造成により平坦面を形成した上で建造されたことも指摘できるだろう。とりわけ③トレンチで確認した造成土層は遺物をほとんど含まない黄褐色土（地山由来か）を主体としており、養老５年（721）の北円堂院創建に際してなされた造成の痕跡である可能性もある。以上の見通しは、第483次調査や第540次調査（Ｂ区）で得られた知見とも整合する。**（山本）**

註

１）大岡實『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966。
２）鈴木嘉吉『奈良時代僧房の研究』奈文研、1957。
３）奈良市教育委員会『南都出土中近世土器資料集―奈良市高天町遺跡（HJ第559次調査）出土資料―』2014。
４）京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』2012。
５）京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』2004。
６）大林潤ほか『興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報 Ⅵ』2012。
７）前掲註６。